

視点・論点・ところてん

「日本体操協会」の事件から思う

はじめに

相撲協会、ボクシング協会、そして、体操協会と、このところ「協会」がらみのニュースが続いている。今回は、宮川紗江選手が日本体操協会副会長の塚原光男氏と女子強化本部長の塚原千恵子氏によるパワハラ被害を訴えている問題について考えたい（このニュースが発行される頃にはある程度の調査報告が出ると思う）。

経緯

この発端は、宮川紗江選手の専属コーチだった速見佑斗氏が暴力行為を行ったとして、日本体操協会が、速見氏を「無期限登録抹消」処分にしたことから始まる。それを受けて宮川選手は暴力騒動について都内で会見を開き、コーチの処分の撤回、軽減を求めた。その際、塚原夫妻のパワハラ問題についても訴え、宮川選手は以前から塚原夫妻が率いる朝日生命体操クラブに移籍を持ち掛けられていたことを暴露した。

当初塚原夫妻はパワハラを否定していたが、一転し謝罪の姿勢を見せる。速見氏も遅れて謝罪会見をした。また、日本体操協会は塚原夫妻を当面の日本体操協会の業務からはずし、第3者委員会による調査を行うこととなった。

渦中の宮川選手は日本代表の合宿と世界選手権の出場を辞退している。（宮川選手は最近行われたオランダ国際大会にも出場し、団体優勝を飾っている。）

旧態然とした体質の改善を

問題の塚原氏だが、オリンピックで3回連続金メダル「月面宙返り」などで世界的に有名だったが、（私も少年時代、塚原氏の活躍で体操競技に強い興味を持った。）1991年の全日本選手権のとき、女子体操選手の出場者91人中の55人がボイコットするという異常な事件が起こっている。理由は採点が不公平だという不満だったが、その時の女子競技委員長が、塚原光男氏で、主任審判が千恵

子氏だったのである。

自分たちの所属するクラブチームの選手の採点を優位にしかねないこの体制は、ボクシング協会のいわゆる「奈良判定」との重なりを感じてしまう。

また、体操は国際ルールで技の加点など、ルールがよく変わる。体操競技の幹部でもある塚原夫妻は、世界の情報もいち早くキャッチできる。先に自分のチームの選手に新ルールの加点の技などを練習させてから、それを他の選手に伝えるなどで、自分のクラブチームを有利にすることもできる。

日本体操協会は塚原夫妻の業務停止を決定した。日本体操界を牽引してきた塚原夫妻だから、いろいろ耳に入ってくることは知りつつ、その強すぎる影響力を懐柔させることはできなかったのだろうか。勇気ある18歳の告発を無駄にしてはならない。

もう一つの問題

宮川選手の記者会見を見ていて、塚原夫妻のパワハラ問題に残念な気持ちになりつつ、もう一つ違和感を感じたことがある。宮川紗江選手の手紙も公開されたが、次のように書いてある。

「私は8年間はやみコーチとともにオリンピック金メダルを目標に毎日……（中略）暴力はよくないことだとはわかっていますが、私は速見コーチに対してパワハラされたと感じていませんし、今回のことも訴えたりもしていません……」

彼女自身が体罰を肯定的に捕らえているのだ。速見氏自身も謝罪会見の際以下のようにコメントしている。

「過去を振り返ってみれば、頭をひっぱたくことをして、髪の毛を引っ張ってしまったり、ほっぺたを平手で叩いたこともあります。体操協会から出てはないんですが、お尻を蹴ってしまったりだとか、そういうこともありました。」

「私自身、子どもの頃にそういう認識を持って大人になっているということがあって、はじめは危険な場面だったり、気持ちの部分で練習に身が入っておらずに危険な場面になってしまうんじゃないというのは自分自身厳しく捉えていて、本当にケガをしたり、命に関わることぐらいだったらということで叩いていました。」

特に後半部分、「私自身、子どもの頃にそういう認識を持って大人になっている」というところに、非常な怖さを感じている。

私自身、過去、試合会場で伝統ある強豪校の指導者が、恫喝しながら選手の指導をしていた風景を思い出す。難易度の高い技を行うには確かに集中力や決断力が必要なのもかもしれない。手っ取り早くそれらを引き出すのに体罰や恫喝が便利な方法だったのかもしれない。だが、そこには選手の人権は微塵もなかった。みんなの前で晒し者のように罵倒されていた風景が私の脳裏にも焼き付いている。

体罰や虐待を受けて育ってきた子どもは親になったとき、自分が受けてきたことを繰り返すと言われている。私の職場の体育科教員に聞くと、「厳しい指導を乗り越えたから今がある」と感じている人は多いし、それは正しい指導だったと多くの人が思っている。この当たり前のような感覚から変わらない限り、スポーツ界の問題は変わらないのではないだろうか。 (文責：辻内)